

著作・投稿・寄稿

幕末の科学思想 — 変革を準備したものとついでに科学への一考察 — (1970年週刊491第5号に投稿)

．．．正徳元年(1711)越後村上・安房北条・周防。同二年加賀大聖寺、同四年武蔵小金井、享保二年(1717)伯耆・因播・備後、同三年備後、同四年周防岩国、同五年紀伊、同十一年但馬生野・信濃上伊郡・越後東頸城、同十二年美作津山領、同十四年岩代伊達郡、同十七年伊予・出雲、同十八年飛騨高山・丹後加佐郡、江戸・伯耆の坪上山、同十九年伯耆・安芸・肥後、元文三年(1738)磐城岩手・但馬朝来郡、同四年但馬・因幡・美作勝北郡、寛保二年(1742)伊予砥部・肥前東松浦、延享三年(1746)磐城、同四年羽前・伊予大州、寛延二年(1749)幡州姫路・岩代安積郡・佐渡・岩代金曲、岩代伊達郡桑折・甲斐、同三年讃岐九龜・伊予大州、宝暦元年(1751)土佐佐川、同三年備後福山領、同四年筑後久留米・伊予西条・美濃郡上郡・大和十市郡、宝暦五年陸中・羽後・出雲広瀬・和泉．．．一揆統発。

天明七年(1787)米価騰貴。一部問屋・林仲間、会所を解散する。同八年幕府、御用達町人に対し拝借金の返納を命ず。寛政一年(1789)旗本・御家人の負債を減免・貸金会所を設

置・大阪米蔵の納宿を全廢。寛政二年旧里帰農令公布・米方御用達起る。寛政六年寛政元年施行の儉約令を十年延長。文化六年(1809)江戸の十組仲間の出金で三橋会所設立。同十年三橋会所経営の米立会所設立．．．。

元文四年(1739)ロシアスペインベルグ探検隊三陸海岸・房州沿岸に出没、日本船と交易。正徳元年(1711)千島列島の第一島を経略。明和五年(1768)エトロフ島をロシア領に編入。明和八年ロシア人ベニョウスキーよりロシアの日本侵略計画伝えられる。天明三年(1783)工藤平助「赤蝦夷国説考」を著す。同七年林子兵「海国兵談」を著す。寛政四年(1792)林子兵、処士横議の罪で処罪さる。同四年ロシア使節のラスマン根室へ来航。同八年イギリス人ブロートン室蘭へ来航。同九年ロシア人エトロフト島に上陸。享和三年(1803)アメリカ船長崎来航、文化一年(1804)ロシア使節レザノフ長崎へ来航．．．。

幕末、それは無類の絶対を誇った封建権力が、打ち続く飢饉と重税に喘ぐ百姓の蜂起の波、富を蓄えていった町人の抬頭、開国を迫る外敵の圧力、あるいは支配の權威の学を否定する事実志向の学問への情熱等によって、その根底から、間接に直接にゆるがされ、新しい時代への息づまる期待とともにその矛盾をさらけ出し、変革へなだれこんでいったそのような時代であった。

「天下を治むと云ふは失いなり。自然には乱も無く、治も

無く唯直耕安食安衣あるのみ。不耕貧食して直耕者に救われながら、民を治め、衆生を救ふなど云ふは、履を冠して笹を心の逆言大罪なり。」

マルクス、バクーニン出現の約一世紀半前、日本の歴史上、自然世の生活をその思想の根底に据え、強固な封建体制下、独自の共産制社会を打ち出した埋もれた一思想家がいた。安藤昌益。

彼が生きた時代は元祿から宝暦にわたり、主だった数だけでも百にも及ぶ一揆、打毀しが続発していた。当時は、儒教思想によって自然が規範的、静観的に人間を規制する身分的秩序原理として把えられていたのに対し、彼の思想は身分制度のみならず、政治、経済構造、宗教、医学、本草、物理等のあらゆる分野にわたり、すべて自然に対する深い洞察から出發し、「互性活真」（活きた自然の事実から、相対的に存在する萬有の性質原理）に包括し、人間の眞の生活を直耕直食としたのである。

彼は子弟たちを北海道から九州に至るまで（松前、八戸、秋田、須賀川、江戸、伊勢、大坂、京都、長崎）散在させた。彼らは医者であったり、薬屋であったり、代官であったり、いわゆる陽忍であった。昌益を中心にした思想の実践は、当時の情況下でいかに危険なものであったかは推察できる。彼らの行動が地方のさまざまな地点で打ち喘ぐ農民を中心とする下層民衆に一つ一つ確実に、生きる糧を生えつけた。そしてまた寄せては返す波の如く次第に高まりゆく一揆。打毀しを支えるには、おそらく名もない幾多の昌益が存在していた

はずである。

この時代はまた、幕臣、武士、浪人、医者、商、町人・・・さまざまな階層の人々が自らの知的欲求を貪欲に伸ばしつつあった。

今日に続く明日が、今日と変わらぬ明日であること、それがあたりまえとして在った身分秩序体制下、商品流通形態、交通形態の変化に伴う経済構造の変化は現象的次元から確実に人々の日常生活に於ける意識構造へと波及していった。

時は蘭学勃興期、江戸、京都、大阪、長崎を中心に諸科学実践の現実的基盤たる数多くの塾が形成されていった。その中心的存在に、杉田玄白の弟子大槻玄沢が起こした芝蘭堂があった。ここでは蘭学を通して、医学、天文学、薬学、物理学等諸科学知識の交換が行われ、京都、大阪付近からこの塾に席を置きその情熱に触れ、知識、実践方法を吸収し、自ら地方へ散って新たな運動の核としての塾を起す者も少なくなかった（小石元俊による京都の辻蘭堂、橋本宗吉による大阪の絲漢堂等々）。

塾に於ける運動は、幕末時代状況が生む必然的帰結として、医学関係者のみならず、田村藍水、平賀源内らの物産家、クナシリエトロフ島を探検した近藤重蔵、林子兵、工藤平助、洋画家司馬江漢等多くの市井の人間をもその渦中に巻き込みながら幕藩体制批判、経済構造、政治機構にまでも上昇していった。

そして、これまでの封建体制の諸矛盾をあげき出し、儒教支配による知識の独占をも打ち破り、諸階層、特に庶民の側

の精神構造へと影響していった。

飢饉で常に苦しむ農民は、その生命を保つために天候を予測し、天災に備える方策を必要とした。この必要は「農業全書」の著者、宮崎安貞、サツマイモの青木昆陽を生み、天文、歴史、地理学を育てた。商品経済の発達につれ、量を知ることが数学、測量学を進展させ、全国実測図の伊能忠敬を、博物産の学などを次々と生み出していくのである。経験をもとめあげていったこれらの自生的学問は次第に理論家への欲望を喚起し、未知への挑戦は全てを投げ打って進んでいく底知れぬ活力にあふれ、医学を中心に広範な展開を繰広げていくのである。

宝暦四年(1764)二月七日、京都郊外の刑場の片隅で三十八歳の男の首なし刑死体の解剖行われる。同八年長州萩、京都伏見、同九年萩で日本初の女性解剖、明和七年(1770)京都、そして同八年三月四日千住小塚原で……。名古屋玄医、後藤昆山が唱えはじめ香川修徳、吉益東洞、山脇東洋などがその大成者とされる古医方の人々には、医学での実証精神を鼓吹し、その主義に徹して自らの経験に徹しない限りは、いかなる古来の権威をも認めないという科学精神の発芽はあった。古来からの五臓六腑説に強い疑いをもっていった東洋は人体の正しい構造、機能を内部に及んで知ることによってはじめて病いは完治できると主張し、人体の内景を見ることを待ち望んでいた。彼の疑問は、カワウソの解剖によっても晴れることはなかった。刑死体の解剖は官の制するところであり、儒教が思想界を支配し、封建体制を支えていた当時、「受刑

死体であろうと死体を解くことは、残忍極まりない行為であり、君子の道に反する許されざる悪行」であるとか、「死体の臓器をみても生体の病を治すには役に立たない」という激しい非難の中で東洋らは覚悟をきめ、公許を懇願し、京都所司代酒井忠用から許可を受けここに日本初の人体解剖は行われたのである。人体を知ることが東洋らにとって何にも増して必要なことであった。これに刺激され刑死体解剖の火の手が上がり後に解体新書を訳出した杉田玄白、前野良沢を決定的に動かすことになる。儒教思想は学問への欲求の前に東洋らを支配しきることが出来ず、また、権力も彼らの覚悟に裏打ちされた医学の前に公許を余儀なくされたのである。このことは、ごく小さな事ではあるが完全を誇っていた意識支配の網を微力であるが確実に破っていくことになるのである。

備前岡山池田家の家来鈴木の総領旭山武士を捨て町医者となる。宝暦十二年(1762)平賀源内祿を辞す。明和六年(1769)麻田剛立脱藩。弘化四年(1821)豊後日出藩元家老帆足万里脱藩上京、被支配者の肉体と精神に対し、極限にまで自らを絶対者として貫こうとする封建体制下において、脱藩は忠誠を破るものとして自らが規制し、又、切腹を命じ、さらに悪事をした脱藩者には打首の重刑を課する厳しい掟があった。

内部矛盾をかかえ、切腹をも覚悟し、また身分として安定していた武士を捨て、家を捨て、自らの理念にまっしぐらに突き進んでいった彼らを支えたものは息づまるような「変革」「究明」へのさまざまな期待であった。意識し、あるいは

は意識しなかったにしろ、彼らのこうした事実への志向が人間の主情的世界から肉体的構造へ、そしてさらに人間を包む物理的、空間的世界へと拡大するにつれて、彼らの行為は着実に伝統的儒教の呪縛から自らを解放し、新しい時代の意識構造をつくり上げていくことになったのであり、科学のもつ具体性、事実性、実利性そのものに対する驚くばかりの発見が封建体制の絶対性をゆるがせ、彼らの内部に権力がみだりに立ち入ることのできない領域をつくり出していったのである。

文化・スポーツ活動の発展のために — 1968年大学工学部新聞に投稿 小波 淳(ペンネーム) —

昨年の学生大会が流会となり、新執行部の基本方針、活動方針が決定しないまま現在に至っている折、今年度の学友会活動はどうなるのだろうかという不安を持たざるを得ない。しかし執行部は動いている。一体何に基づいて動いているのだろうか。新入生歓迎行事にしても、文化・スポーツクラブを無視した歓迎合同実行委員会の設立、そしてその内容といえど昨年度とほとんど同じ。昨年度も感じたことではあるが、執行部は新入生歓迎の意味(私達三年・四年生にとっての、新入生にとっての)がわかっているのではないのではあるまいか。映画(ミュージカル・恋愛物)、ダンスパーティー、ハイキング・・・と、お遊び行事とでもとらえているのだろうか。東京都立大教授の講演会ひとつだけが何かしら異種に思え

た。執行部の人達は講演の内容が私達にとって適切であり、良かったと総括しているが、私達にその内容がどのようなかみ合い、そしてどのように良かったのか、欠点は、又これからの私達の行為にどう結びつくのかという展望まで語らなければ総括といえないだろう。手放して喜んでいる時は、その後には必ず陥し穴が潜んでいることを知らなければならぬ。私が思うに、新入生を歓迎するということは、少なくとも現在当工学部学生が抱えている問題から、大きくは私達を取り巻く現状において私達が一個の人間として問題にしなければならぬことを新入生に提示し、話し合い、これから執行部が口癖にしている民主主義、学内の統一と団体、これはこれからの行事の中のどこに顕われているのだろうか。ゲンバの会場にだろうか。合ハイにだろうか。さらには、サークル活動の活発化を口にししながら、サークルを無視した実行委員会設立をやっている事実をどうとらえたらよいのだろうか。ひじょうに疑問を持たざるを得ない。

このような折、最近わたされた学友会誌に「災」編集委員の名で「一層の文化、スポーツ活動の発展のために」というサークル論が載っているのに気付いた。この文に対して少々不満や疑問な点を感じざるを得なかったので、私のサークルに対する考えをおりませながら述べてみたいと思う。

「災」の人達は流会に終った学生大会において提出された対案書の中のサークル論に対して書いている。まず、クラブ

・サークル連絡協議会準備会が結成された時にサークル論・運動論がないといってその不明確さを指摘した人達を誤っていると書いている点から述べなければならぬ。

何ら方向性、運動論の欠如した運動において何かを為した例があるだろうか。何かとは何十項目かの要求を勝ちとるところではない。こういった要求はあくまでサークル活動をささえるものではあっても活動内容ではないはずである。運動論の不明確さという本質的な点を指摘したのに感情的な理由（実に本質的でない）でかたづけけることは絶対に間違っている。もっと謙虚にならなければならぬのではないだろうか。そして又勝ちとった要求から現在のサークルにおいてどのような活動がなされているかといえば、以前と変わらぬ、いや以前よりも低迷した活動が存在しているだけである。勝ちとったという成果を「炎」の人達や執行部は後生大事にしているが、現在のクラ連協が何をしているといえるのか。もちろんクラ連協の存在は有った方がいいし、有るべきものと思われるが、だからといって要求を勝ちとるだけの形骸化した有名無実の協議会であっていいはずのものではない。

「我々のサークルの意味は趣味でもなければ娯楽でもない。そして単なる人間関係、友人を求める機会を得るためではなく、又社会に出たら役立つ様な先輩、後輩の関係を、付き合い方を、協調の精神(?)を学ぶものではない」という文にどんな侮辱があるといえるのか。まさに当工学部サークル活動の大半に当てはまる問題点ではないのか。私達の周囲の

現実には目を向けずに何ら危険のない温床でぬくぬくとしている活動は絶対サークル活動とは認め難い。真にサークル活動で何かを創造し、止揚していくためにはこのようなべったりした人間関係を取り去り、裸で向き合った人間同士のはげしいぶつかりが必要である。

フォークソングに関する所を読んで私は笑ってしまった。要約すると、「ジョン・バエズはフォークソングを歌って反戦運動をしており、フォークソングはベトナム反戦と共に広まった↓日本にもフォークソングが流行している↓日本のフォークソングもりっぱな反戦運動をしている」と「炎」の人達は知っているが、私がここで指摘するまでもなく、明らかに誤った破論法と言える。確かにジョン・バエズは反戦歌(?)を歌い反戦運動をしている。だが日本のフォーク界では反戦の反すらも見い出せない現状ではないのか。さらに、バエズの反戦行為に関して問題にするときは彼女の行為のあり方、内容を問題にすべきであって表面にあらわれたことで判断するのもおかしいことである。そして、ひとつの例が全てに当てはまるという倫理の誤りは小学校ですでに教えられていることである。かの有名な森山かよ子ですら、「バエズは尊敬するが、私は反戦歌は歌いません」といっている。少なくとも　　の日本のフォークソングは、映画「日本春歌考」(大島渚作品)において扱われている程度のものでしかないことは明らかなことである。

運動部について同じようなことがいえる。現在の工學部の運動部をサークルという観点から考えるなら対案書に書かれてあった「その機能はいたずらに学養超過の、そして欲求不満のはけ口として存在するのではない」ということは間違っていない。しかし私が見る限りでは現在の運動部はサークルの機能は持つていないと思う。「炎」の人達は運動部の人達が一体どのような犠牲を払って活動しているか、といったのだろうか。私には我が身を鍛えるためと、べつたりとした人間関係のための犠牲であるとしか考えられない。もし運動部も対案書でいつている意味で、又私という意味でサークルであるとすれば、少なくとも独自の運動論が存在しているはずだが私はまだ聞いたことがない。

「民族的、民主的文化、自主的民主的學問研究、自主的、民主的スポーツを求め、創造的科學的精神を養い、健康で明るい學生生活をめざすことは學生にとって切實な具體的な要求である。」……よく並べたものだと思心させられる。余程民主、自主という言葉がお好きらしい。それはいいとしても、当工學部に「炎」の人達と同じ考えを有する方々の執行部が誕生してからのような民主云々が生まれたというのだろうか。民主的文化、民族的學問研究、民主的スポーツ etc. . . . これらは一体どのようなものなのだろうか。具體的な要求どころか全く抽象的な言葉ではないのか。第一、現実へ対処しようとする者にとってその前途は民主的云々の羅列で解決できる程明るいものでは決してはないはずである。もっと現実を見つめなければ「炎」の人達という現

実(社會)を變革することはできないだろうし、そして又現実の穢さ暗さにもっと絶望し、その中から這い上ろうとするエネルギーこそが現実變革に群がるものだと思う。ベトナム云々いいながらのガンバや合ハイのようなレクリエーションの集りからはけつしてこのエネルギーは生まれにくいことは確かである。

御苦勞なことに、サークルをイからチまで分類しているが、どうも運動体としてのサークルとただの集團をごちゃ混ぜにしているようだ。第一、サークルを手段、目的で分類すること自体おかしいと思う。このような非生産的なことはやめた方がいいと思う。サークル論は分類することではなくサークルの在り方や、やっていることを問題にすべきである。樂しみのためのサークルはそれとして認められるのではなく、それはあくまで樂しむための集まりであつてサークルではない。サークルとして考えられるのはどのような手段、目的のサークルであれその根底に共通したサークルの意義は存在するのです。そして集まった人達が独自の運動をサークル内で、さらにはサークルの外の現実へ向けていく運動体としてのサークルのみが現実變革のエネルギーを包含しうることは明白なことである。

グリーなどは新入生歡迎オリエンテーションにおいて、「私達のサークルは歌つて樂しむ集まり」といつている。これは自らサークルとしての持ち得る機能を捨ててしまったものと見做して誤りはないだろう。私が見る限り、工學部内で

わずかにサークル的に活動していると思われるのは社研と写真くらいである。しかしこの二つのサークルとしてその内部における運動もさることながら、とくにその運動をサークルの外側へ向けて展開していく所に多くの問題があるように思われる、つまりサークル内での考え、方法が外へ向つては強力な力となっていないということである。しかしながら少なくともサークル内で真剣に自己の問題に取り組む姿勢に、運動体としての可能性の一端が見い出せるだけでもこの停滞した工学部サークルにとって貴重であろう。

私がこのように反論してきた点を考えてみて、「炎」の人達が反動勢力、分裂主義者呼ばわりする対案書のサークル論に一体どのような反動が分裂工作があるといえるのだろうか。むしろ「炎」の人達が用いる感情的なセクトやドグマが明らかにするだけではないだろうか。私がこのこととを指摘するよりもっと的確に指摘している文を引用してみよう。

石堂淑郎「映画における幻想と死」(デザイン批評・1968
・2・NO・5)より

．．．．．中略．．．．．

つまり、ポニーとクライド(アーサー・ペン監督)俺たちに明日はないの主人公達は、絶望をその両肩におぶつたまま譲らず遂に殺され、創価学会・民青はその絶望を宗教的・政治的幻想という偽りの希望に肩代わりさせるのだが、

少なくとも前者は精神的な疎外を肉体によってうけとめることによってプロテストしているのに、後者は疎外からより大いなる疎外へと移行しているだけなのである。キエルケゴール風にいえば絶望を絶望としてうけとめて死ぬのと、絶望を希望という名の絶望に肩代わりさせてニコニコするのとどちらがより絶望的であるのか、勿論、後者である。これをいま別の面から考えてみれば、学会なり民青なりの核である宗教的、政治的幻想は敵対者に対する憎悪をその唯一の栄養としていることがあげられる。つまり彼らのニコニコ顔は非同調者に対する憎悪の顔と表裏で一体であることを忘れてはならない。それは幻想という見えざる呪縛の力にとらえられている人間のつねである。

．．．．．後略．．．．．

「炎」の人達はこの引用文の内容をどのようにとらえられるでしょうか。

「炎」の人達は対案書を部分的にとらえて非難しているが、さてそれはどうすればいいのかという点に關しては、民主的、自主的云々という一般的抽象的言語をふりかざすのでは仕方がないでしょう。これはあくまで非難でしかない。読む方でも戸

惑うし不満を感じて当然です。それに、現在の日本ではどこにも民主的と名のつくものは存在していないと思うし、私には「炎」の人達のような民主云々は永久に存在しないような気がします。いやたとえ存在したとしてもそれは真の民

主云々ではないと思う。第一、民主主義の原理とよくいわれている多数決の原理ほど暴力的なものはないのですから。最後まで個と個のはげしいぶつかり合いでなければならず、その中で運動を發展していくのがサークルであると思う。

現在、工学部サークル内に巣喰ってっている低迷とマンネリの根本的原因是は、サークル員一人一人が個としてのサークルに対する意識を持っていないことにある。つまり、サークルは何を為しうるのか、何を為さなければならぬのか、サークルが現実（社会）の中でどのように位置づけられるのか、サークル員たる個人はいかなる行為をすべきかといった点が追求されなければならないのである。又自分の生き方に対して何ら疑問や悩みを感じられない（自らの甘さのため）点にもその原因があるだろう。従って現状において必要なのは、サークルの一人一人が一個の人間として自己への問いかけを始めることである。自己の存在のしかたを疑うことである。

サークルが運動体としての機能を持ちうるのは、前述の行為をなしたサークル員一人一人が現実の中で抱えている諸問題をサークル活動の中に持込んだ時である。この時にこそ具体的サークル活動（例えば、写真部なら写真を見、撮ること）によってさまざまな問題が提起されなければならない。しかし、現在の工学部のサークルの状況ではそういった問題提起も大部分のサークル存続主義者によって打消されるかも知れない。しかし私達は、サークルはサークル存続のための

サークルではなく、又こういつた存続主義者のものでもなく、一個人の意見を消し去っていい理由はどこにも存在しないのだということをして、サークルを動かしていくのは構成員一人一人であることを考えなければならぬ。そしてサークルがその機能を持ちえた時、私達のまわりの様々な問題を生ましている現実（社会）へ向って、真の行為がなされるのである。そうでなければ個人の問題は個人の中で内閉するサイクルを描くだけで終るだろう。そして現実はいも変わらず私達を呑み込みながら膨大に変化し続けるだけである。

現在サークルの問題に取組んでいるある女性はいっている。

『蟻地獄の中にいる蟻と同じ状態ではあるけれど、蟻地獄には死がまっているが私達のは、いわゆる楽な事がまっている。今この手をはなせば、楽になるのだが……』と。（でも）いくら振り出しに逆戻りしても負けたくない』と。又他の女性はこういつている。『奇妙なことには、過酷なはずの社会の中には広漠と安易さが広がっているのだが、その中にとつぷりと浸ってしまい、そこから出ようとものがくことさえ愚劣であると思わせるような抜け道のないいらだちの中にはまり込んでしまう。そしてこの慣れこそが、生ずることの中に於てある歓楽に与えられた極めて凄烈な復讐であるのかもしれない』と。この二人のことばには私の内部に鋭く突きささる。このような自己へのきびしい告発の例は、まさに工

学部の大半のサークルが、又個人が現状況における自己の問題として真剣に取組まなければならぬ点を確に指摘している。そして、もはや個人的な問題から具体的サークル活動を通して一つ一つ解決していく行為を明日といわず今から始めなければならぬ。しかも、自分でやらなければ他の人は誰もやってはくれないことをはつきり自覚しなければならぬ。

雪が舞う東北の地への風信 — 1970年 会社同期会誌「むくの声」第4号に投稿 小波 淳 (ペンネーム) —

わたしがおまえのすむ(かつてわたしもすんだ)土地を離れてからも二度目の冬を迎えようとしている。

かつて、離れるに際しわたしの幼さをむきだしにしておまえに迫ったものだった。そのしぐさの幼さをしつたわたしではあったが、思いつめてまた同じようなことをやってしまう最近のわたしであることを思うとき、わたしがわたしとおまえの関係を「対なる幻想」という領域で対象化しようとしていることも、結局はまだまだ未熟なものであることを思うのだ。わたしに関する領域がそのままおまえのものへ、そしておまえに関する領域がとりも直さずわたしのものへという地続きの関係を現実的たらしめる方法論を獲得するにはまだまだお互いに幼いようだ。もしかしたら、それは方法論などと規定する必要のない、男と女の間にときたま交わされるあの言葉にならないものにかかわることなの

かもしれない。

先だって、めずらしく上京してきた兄と、若干の気恥しさを覚えながらおまえとわたしの関係を語り合える一夜をえられた。そのときもやはりわたしたちがまだまだ未知の関係にあり、おまえを包括しうるわたしの空間の未熟さを思った。それはおまえにとつてもいえることだろう。最近短かい文章を読んだ。その中に、ある一組の夫婦の存在のし方についてのべている部分がある。少し長くなるが書きとめておこう。

.....

・・・山の中で夫婦二人きりでくらししていればこうなるよりほかないとおもわれるように、今日ついたばかりの眼にもふたりの間が温かくすつきりと疎通していることがすぐわかった。(中略)そして高地のせい、夫婦のどちらにも粘着するようなものはなく乾いてさばさばしているのも、わたしの眼には愉しかった。息子は出征していて、いまはこの宿の並びに家をつくって自給しているといったことが、その夜いろいろ端で書いた夫婦の身上であった。この夫婦は忘れたがい印象を弱年のわたしにのこした。

いろいろ端には、ときどき鼠がちよろちよろ出てきて、うろろう餌になるものをさがしている様子だったが、驚いたことにわたしたちがいてもすこしも怖がらず、夫婦も追い払おうとしなかった。(こんな山の中ですから鼠も家族みたいなもので)といいながら、丁度飼った猫にいうように奥さんかときどき(すこしあつちへいっておいで)と鼠のほうへ声

をかけ手で追うしぐさをする。奥さんにしいて追い払うつもりがないので、鼠のほうも逃げる気はないらしい。どこかへ引っこんでは、またちよるちよるあらわれるのだった。

ああこの夫婦はいいな、この主人の声はすんでいい声だ、この奥さんは親しそんでいて粘りつけがなくていい。そういう夫婦もこんな山の中だからこそ在りうるのだな。おれたちはどうせ戦争で駄目だが、こういう夫婦に偶然であったことはおれにはどんなにこの世の土産になるかもしれない。わたしはしきりにそんなことばかりかんがえていた……

以上

――吉本隆明「自立の思想的根拠」――ひとつの死より――

この文章からおまえがなにを想うかわからないが、ごく平凡ないわゆる庶民ともいえる夫婦の關係に 対する一人の人間の感性が、そして共感が書かれてあることはわかると思う。

この風信を書いている今、ラジオのニュースは今日の事件（三島由紀夫の割腹自殺）を報じた。

一瞬嘔吐を覚えた。それが何によるのか今はわからないけれど引用した文章の著者と同じく、夫婦の 在り方に共感する自分と、三島という一人の著名な人間の死に嘔吐を覚える自分……。

わたしにとっては何らかに（仮にその夫婦の死がわたしに報じられたとして）山の夫婦の在り方のほうが重たいと感じられる。たしかに三島の死は（詳しいことはわからないので

何ともいえぬが）このようにも人は死ぬるものかということとで衝撃を覚える。しかしそれがわたしの「人が生きる」ということに対する思想的次元にまでくい込むものではない。山の中の夫婦の在り方のほうがより基底部においてわたしとつながっているように思えてならないのだ。

人は何によって生きるか（生活するか）。また死にうるべきいかなる理由をももちうるのだろうか。

三島の死は死にうるべき理由を持った（？）一つの例といえるのかもしれない。それにしてもあまりに直截すぎはしないか。私には生きる過程も死に至る過程（死に過程もくそもないといえるかもしれないが）も、もつとゆるやかなじつくり煮つめられていくべきもののように思えるのだ。また、生き抜くことに、自らの全存在を投入していく過程はいかなる名目を伴った死などよりも得難く思える。

三島の死が人々にどのように影響するかはしらぬが、人が生活のレベルを他から影響をうけるのは、日常の現実性、具体性を通じて昇華されたもの、また逆過程をたどれば人の日常の基盤となるもの（「思想」）からであると思えるのだ。

まだまだ幼いわたしたちはさらに多くの生活者からその過程を学ばなければならないようだ。

おそらく、人間が一人から二人に、さらに二人からより多数へとその關係を拡げていく過程には、拡がる度合に忘じて多くのものが抜け落ちていくはずだから……。

一つの死を契機に、最初に書き始めたことだからだ。いぶそれ

たように思うが、一九七〇年十一月二十五日現在わたしが思うことはこんなことである。

これから訪づれる長い冬を想うとき、東北の地の風土は少なからずわたしの精神形成に影響しているようだ。より暖かいこの地において囲りは冬とはいえど明るくなごやかだが、わたしの心は雪の舞う東北の地にいるのとたいして変わりはない。

やましんサロン投稿記事から

令和2年4月16日掲載.. 「写真短歌」 知り親んで

写真を長年続けてきた私は最近数年短歌を嗜むようになり、写真も短歌もその作るプロセスに共通点があることに気がきました。そしてこの二つを合体して一つの作品にしたら面白いのではと考え、「情景を切り撮って詠う『写真短歌』として紹介することを思い立ちました。

「何気ない一枚の写真に短歌を添えて発信力が増す魅力を紹介します」というキャッチフレーズを考えていたところ、ご縁があり山形市立図書館からありがたい計らいを頂戴し、昨年2月から本館1階に「写真短歌常設コーナー」を設けて作品を紹介しております。

季節を先取りした写真にやましん歌壇に掲載された短歌などを添えた写真短歌2作品を2ヶ月毎に入れ替えて展示し、図書館を訪れる方々の息抜きの空間になればとの想いで継続しております。

また、1年間展示してきた12作品をこの2月22日から1ヶ月間開催された「山形市立図書館2016年市民の出版物

展」でまとめて展示する機会をいただき、写真短歌という分野の一端を紹介することができました。

常設コーナーは2年目を迎え第7回（2～3月）、第8回（4～6月）の作品展示をしております（現在は休館中）。

山形新聞、市広報、メルマガなどの紹介記事を見て訪れた方や日々来館された方からご連絡をいただいで情報交流につながっております。

今後もの展示を継続することで写真短歌の認知度が上がり、たしなむ方が増えるささやかな一歩になることを願っております。

令和2年10月23日掲載.. 投稿契機 交流生まれる

今年4月やましんサロンに掲載された「写真短歌」を知り親しんで」という私の投稿が契機となり、さまざまな方々との交流が生まれております。

また、その効果もあってか、昨年11月に私のホームページ（HP）のリニューアルを機に開設した「写真短歌・写真俳句・その他の投稿ページ」に写真、短歌、俳句、回文、イラストなど「組合せの妙」とも言える74作品の投稿をいただくまでになりました。

一方、2年目終盤に入った山形市立図書館常設コーナー「写真短歌」への誘いの掲示作業や職員の方々との意見交

換で前述の作品群が話題になりました。そして、下記の三つの規定に沿って2ヶ月ごとに2作品を入れ替え、常設コーナーⅡ「表現の杜」への誘い」としてこの8月から紹介することになりました。

対象は①私のHPへの投稿作品(写真短文、写真俳句、写真回文、回文イラストなど)②フェイスブックの「友達の投稿」に掲載されている写真短文、写真俳句など③友達の投稿内の写真に触発されて私が短文添えて共同制作作品とした写真短文です。

「『写真短文』への誘い」「『表現の杜』への誘い」という二つの常設コーナーがこれからも図書館を訪れた方々にとって息抜き場となり、さまざまな表現方法の広がりを生み、それらをたしなむ方々が増えるささやかな一歩になることを願っています。

令和3年1月21日掲載… 福祉向上へ活動を発信

当ガイドマップは平成15年に開設して以来19年の間山形市福祉のまちづくり委員会が運営・更新を続けています。

この間、障がい者のニーズに応える対応を進める中、ラスポーツ、アピリンピック、パラリンピックやインバウンドの波が山形にも届き始め、当該マップの多言語化ニーズの高まりを感じていました。

この度『赤い羽根共同募金』の補助を受け令和3年度の委員会の活動として本事業遂行を進めてきました。事業着想時(数年前)、HPの多言語化は都度翻訳作業を経てHPに掲載するのが主だったため事業の計画は英文化のみでした。その後Webサイトにおける翻訳の現状調査をしたところその技術や翻訳サービスが大きく進化し、大手○○○の無料自動翻訳サービスでは英文に限らず多数の言語まで対応しており、この自動翻訳(特に英語)の精度の検証結果では固有名詞について不適切な数力所がある程度で十分に実用に耐えうる事が判りました。また、市内に在住する外国人の数や当HPへの外国人アクセス者のデータをもとに利用者の利便性を考え英語の他に中国語、韓国語のバージョンにも当該サイトから簡単に展開できる表記を加えました。

私たちは海外渡航など特段のニーズが無い限り外国語でWebサイトへアクセスすることは少ないと言えますがこれを機会に多くの日本人の方々にも多言語化に対応したこの山形市バリアフリーガイドマップにアクセスする機会が増えることを願っています。

令和3年4月11日掲載… 15年の活動に意見せひ

私がかつて山形の地を離れ神奈川の企業に30年勤務した後1999年にUターンし、企業で培ったスキルを活かして山形で起業しました。当時はまだ少なかった産学官民をサポートする課題解決コラボレーターとして仕事をしてきまし

た。この間、NPOやボランティアなど「民」を支援する業務にも携わり、70歳で法人を解散してからも地域活動を続けています。

この地域活動の一つに地域力共創推進コンソーシアム（以下、コンソ）の活動があります。「地域力を創発・発展させるためのコミュニケーション・プラットフォーム」として活動し昨年15年目を迎えました。昨年度当初にコロナ禍が発生したことから、この年をコンソの「15年の活動の軌跡」を冊子としてまとめる年と位置付けました。そして、より多くの方々に届けるためパソコンやスマホ端末で読んだり印刷したりすることが可能な電子ブックとして5月末に発刊し、Web公開しました。

この冊子には15年間の活動の軌跡の掲載の他、さまざまな形で活動に関わっていただいたコアな関係者10人からの寄稿を掲載するとともに、いただいたご意見、要望は「活動の総括&展望」の章に反映し、現在その具体化を模索しております。

この電子ブックは「地域力共創推進コンソーシアム」で検索して見ることができます。皆様のご意見をお待ちしています。

荘内日報投稿記事から

令和4年11月22日「私の一冊」に掲載…

「名こそ惜しけれ」の精神

取り上げる一冊は少し古いが2005年発行の「国家の品格」。著者は作家新田次郎と藤原ていの次男で数学者の藤原正彦氏。たまたま書店で「国家の品格」という書名が目に入り購入。氏の書籍との初めての出会いとなった。

私がUターンする前に30年間の企業勤務を経験しその間で海外駐在を経験しているからだろうか特にこの本の第の章『なぜ「情緒と形」が大事なのか』の中の「真の国際人には外国語は関係ない」大切なのは「国語、読書などによる総合力」と言い切る多言語に長けた著者の言葉が重く心に残っている。

この論述に反応する自分には次のような社会経験があるからだろうと思っている。一つは企業入社して間もない頃の会社の英会話教室で米国人教師に「日本の結婚式で女性が身に付ける「角隠し」と「綿帽子」の違いは？」と問われ、私を含め誰も答えることが出来なかったこと。二つ目は後年の海外駐在現場のパーティ席上で欧米の技術者から日本の歌舞伎や文楽、狂言などについて問われてその答えに窮したこと。日本語ですらうまく語れないことを英語で出来ないのは明らか。これらの苦い経験を記憶に留めて今の私があると思っ

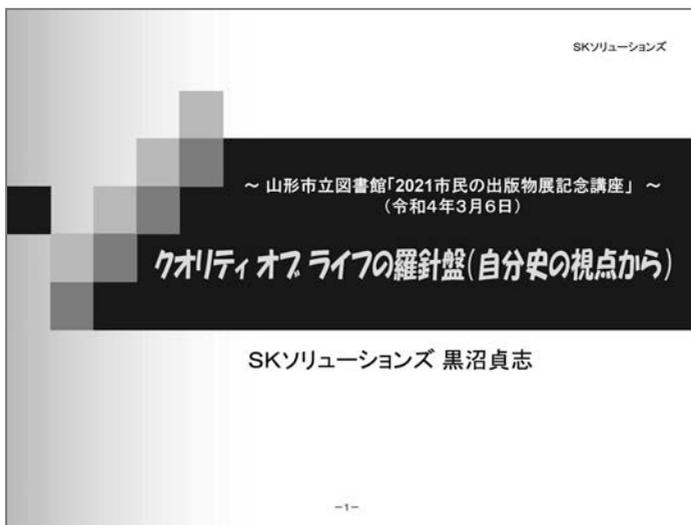
ている。Uターンして20余年、今やGoogleの無料翻訳など便利な時代となり隔世の感（過ぎたる便利に潜む不便利もあるが・・・）。

本書の最後の章「国家の品格」の最後の項「世界を救うのは日本人」に記されている次の箇所強く共感を覚えるのでその一端を紹介したい。

「駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クロードルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

このような考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という精神に通底するのではと思うのは私の勝手だろうかと自問する今日この頃。





Contents(もくじ)	
☆プロローグ ・配布&机上紹介資料 ・講座の位置づけに代えて ・プロフィールに代えて	☆日々の“ころがけ(準備作業)”
☆はじめに	☆四住期の整理から羅針盤への道筋
☆ライフサイクル(人生)の区分	☆参考事例
☆クオリティオブライフ(QOL)の対象	☆制作した冊子、デジタルコンテンツなどの利活用(寄贈、納本、その他)
☆人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法	☆まとめて代えて
	☆終わりに
	☆質疑応答&補足説明

-2-

プロローグ①(配布 & 机上紹介資料)

♪ 配布資料:

- ・説明資料
- ・添付1: DVD私的アンソロジーの「DVDカバーシート」
- ・添付2: 同上の「プロローグ」
- ・添付3: 同上の「メニュー & マップ」
- ・添付4: 倉本聰の「履歴書」

♪ 机上紹介資料:

- ・DVD「私的アンソロジー」
- ・冊子「続 私的アンソロジー“しあわせの構図”」
- ・団体の発行資料
 - ①山形げんきであつたかづくり
 - ②やまがた食の甲子園[®]10年史(2005-2014)
 - ③地域力共創推進コンソーシアム活動の15年の軌跡 2006～2020
 - ④東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み

プロローグ②(講座の位置づけに代えて)

そったく どうじ 啐啄同時

禅の言葉に「啐啄同時」というのがあります、卵の中のヒナ鳥が殻を破って まさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側から雛がコツコツとつつくことを「啐」といい、ちょうどその時、親鳥が外から殻をコツコツとつつくの「啄」といいます。雛鳥が内側からつつく「啐」と親鳥が外側からつつく「啄」とによって 殻が破れて中から雛鳥が出てくるのです。両方が一致して雛が生まれる「機を得て両者相応じる得難い好機」のことを「啐啄同時」というのです。…早くてもいけない、遅くてもいけない、まことに大事なそれだけに危険な一瞬であり啐啄は同時でなくてはなりません。

< 出典 >

禅の公案書である碧巖録(へきがらろく)であると言われていています。また、京都教育大学の学長室には元学長の山内得立先生(ギリシャ哲学の大家)の書がかかっているそうです。

プロローグ③(プロフィールに代えて)

- ♪ 1947年 山形市生まれ
- ♪ 山形東高、山形大学工学部を卒業
- ♪ 1969年 日揮(株)入社(30年勤務)
 - 企画・プランニング・基本設計・建設・運転・プロジェクトマネジメント・営業などを通して海外および国内産業界の各種ソリューション(課題解決)・プラント建設・運転などを担当
- ♪ 1999年 日揮(株)を早期退職してUターン
- ♪ 2001年 (有)SKソリューションズを設立(2016年解散。その後はSKソリューションズとして活動中)
- ♪ その後、ビジネスや産学官民連携支援、更には主に次のような「しくみ」などを通じて地域活動を継続中
 - ・地域力共創推進コンソーシアム(代表)
 - ・おいしい山形の食と文化を考える会(事務局長代理)
 - ・東北まちづくりオフサイトミーティング(運営委員)
 - ・NPO/パワーアップコンソーシアム(代表)
 - ・山形市福祉のまちづくり活動委員会(事務局長⇒監査)
 - ・(LLP)山形ふるさと企画舎(代表)
 - ・山形県生涯学習センター遊学館講師・指導者

はじめに

古来、人の一生は四つに分けて語られておりそれぞれの期間を“どのように生きるか”を記した情報が多く見られます。そして昨今、人の生き方は“クオリティオブライフ(QOL:生活の質)”として語られるようになっていきます。

このQOLを高める生き方が注目されるいま、これまでの普段の生活を振り返り、今後の“人生の道しるべ(羅針盤)”にできるような方法について事例を交えて紹介します。

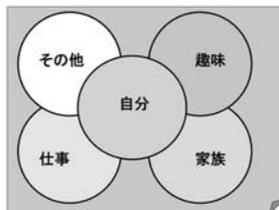
ライフサイクル(人生)の区分

人生を4つに区切って考えることは古代インドの社会的規範を記した聖典「マヌ法典」の考え方で【四住期】として知られています。特に「林住期」や「遊行期」は作家の五木寛之氏の著作で知られるようになりました。氏はこれに日本で良く知られる青春、朱夏、白秋、玄冬を対比して記しています。

学生期(~24歳) ⇔ 青春
 家住期(25歳~49歳) ⇔ 朱夏
 林住期(50歳~74歳) ⇔ 白秋
 遊行期(75歳~) ⇔ 玄冬

クオリティオブライフ(QOL)の対象

誰もそのライフサイクルの中で自分、家族、仕事、趣味、その他の領域で何かしらの出来事やテーマを持つことになります。つまり、それぞれの場面で程度の差こそあれ(また、意識するかどうかは別にして)アクティビティ<プロジェクト(事業)、イベント(出来事)、エピソード(逸話)>を経験しながら生きています。例を挙げれば入学、就職、結婚、子供の誕生、病気...様々の経験をすることになります。



人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法①

下記に例示するような縦軸に自分の生活のカテゴリー(自分、家庭、仕事、趣味、その他)を横軸に四住期の座標軸を作成して、それぞれが交わる領域にどのような出来事(アクティビティ)があったか列挙することで全体像(自分が歩んできた道)が見えてきます。

生活のカテゴリー & アクティビティ	四住期	学生期	家住期	林住期	遊行期
自分					
家庭					
仕事					
趣味					
その他					

-9-

人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法②

私が60歳で上梓したPCで見る「DVD 私的アンソロジー」を制作した際に事前に作成した「メニュー&マップ」をお手元に用意しましたので紹介します(添付2)。

この時はこれがまとまったことで目的とする成果物の“コンテンツ(もくじ)”と“全体のイメージ”がほぼできたことになりました。

因みに、TVドラマ“北の国から”で知られる脚本家(私の好きな脚本家の一人)倉本聰はひとつの作品をつくる時に主要登場人物のアウトラインを表す「履歴書(就職時に使うものとは異なる)」を作ると紹介していました。特に大きな作品ではそれらは巻紙のようになっているものをTV番組で紹介していました。そのことが作品(脚本)の中の登場人物のしぐさ、台詞や場面描写に活かされると理解しました。

氏の「履歴書」作りの概要は添付3を参照ください。

-10-

日々の“こころがけ(準備作業)”

コンテンツが出来上がるとそれぞれの中味をどうするか(どのように表現するか)の段階になります。
幸いにも私の場合は起業してしばらくしてHPを作成 & 更新して添付2に記載したアクティビティのほとんどの項目はHPにアップしており大半のデータの準備ができておりました。

つまり、大事なことは日々の「**生活のカテゴリー & アクティビティ(自分、家庭、仕事、趣味、その他)**」を**如何に記録しているか**にかかっているということになります。

四住期の整理から羅針盤への道筋

- ①「四住期 × 生活のカテゴリー」の整理
⇒ アクティビティの「見える化」作業
- ↓
- ② エポック(代表的)なアクティビティの洗い出し
- ↓
- ③ コンテンツの作成
- ↓
- ④ 表現方法の選択: ワードなどの文書作成ソフトの選定
⇒ PDF化、画像化(JPEGなど)
- ↓
- ⑤ 表現手段(媒体例: 冊子印刷、デジタルブック、手作り冊子、PC版DVD、その他)の選定
 - ・冊子印刷: 一般的な印刷所、ネット印刷
 - ・電子ブック: Webサイト上で冊子をめくる様に読むことができる媒体(比較的廉価)
 - ・手作り冊子: 冊子部数に制限
 - ・PC版DVD:

参考事例①:個人レベル(自分史など)から

これまで個人のレベルの話をしてきました。それらは

①DVD「私的アンソロジー」の発刊(60歳)

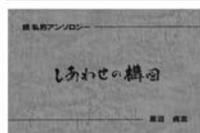
制作ソフト(Adobe flash player)がサービスを
終えており現在は再現不可



②冊子(&電子ブック)「続 私的アンソロジー “しあわせの構図”」の発刊(70歳)

・表紙画像(題字は佐藤紀之氏の書)
・電子ブック

URL <https://sk-solutions.org/archives/anthology2>



参考事例②:団体レベル(活動史など)から

例えば、私が関わってきた次のような各種地域活動も対象を個人から組織に広げたものと言えます。

(1)「山形げんきであつたかづくり」 31頁

山形市委嘱で活動して制作した「山形市バリアフリーのまちづくり推進モデル」の冊子とその電子データ(PDF) 実冊子:机上サンプル参照

(2)「やまがた食の甲子園[®]10年史(2005-2014)」 30頁

おいしい山形の食と文化を考える会の「食の甲子園[®]」を紹介する冊子&電子データ(PDF) 実冊子:机上サンプル参照

(3)「活動の15年の軌跡 2006～2020」 36頁

地域力共創推進コンソーシアムの活動の軌跡を纏めた電子ブック(*)、電子データ(PDF)と冊子
実冊子:机上サンプル参照

(*) : https://sk-solutions.org/RPCC15th/index_h5.html#1



(4)「“未来へ伝えたい”東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み」

復興ボランティア支援センターやまがたの活動10年のあゆみを纏めた冊子&電子データ(PDF) 60頁 実冊子:机上サンプル参照

制作した冊子、デジタルコンテンツなどの利活用(寄贈、納本、その他)

<受入れ先>

(1)公的機関

- ①居住地の県、市立図書館など: 冊子のみ
- ②日本自分史センター(公財かすがい市民文化財団): 冊子、DVD
- ③国立国会図書館: 冊子&デジタルコンテンツ

(2)民間:印刷所、ネット印刷会社のなどのWebサイト実績集に掲載

<提供実績例:寄贈、納本、その他>

受入れ先	(1)公的機関			(2)民間	
	①居住地の県、市立図書館など	②日本自分史センター	③国立国会図書館	印刷所の事例集	事例集
業績事例					
1-(1)10の私的アンソロジー		○			
1-(2)続 私的アンソロジー 「あわせの横濱」	○	○	○	○	○
2-(1)山形元気であったかづくり	○	○	○	○	
2-(2)やまがた食の甲子園 10年史(2009-2014)	未定	未定	未定	○	
2-(3)活動の15年の軌跡 2006～2020	○	○	○	○	○
2-(4)東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み	?	?	?	?	?

-15-

まとめに代えて①(人生の節目を詠んだ短歌:やましん歌壇掲載歌から)

- ◎令和三年 大滝 保道
亡き母の彩見の日記に挿まれし彼岸の兄の記事の懐かし(写真短歌)⇒思わぬ発見
- ◎令和三年 佐藤幹夫道
名を刻す指輪で特定されし友散りし砂浜禍祈る十四忌⇒かつての友の死が判明した理由
- ◎令和三年 井上管子道
寄贈せし己が冊子の納まりし書架の隅舞台のごとし(写真短歌)
⇒市立図書館へ冊子を寄贈した時
- ◎令和二年 佐藤幹夫道
「おとうさん」幼い文字の絵日記が不意に現るキャビネットの奥⇒思わぬ発見
- ◎平成三十年 井上管子道
中東で散りし友らの七四忌雪の凍む朝この地で祈る⇒74/エリザベス事件(務めた会社)が関連
- ◎平成三十年 門部京子道
一病とつき合いてはや半世紀遊行の門への歸杖とせむ⇒自身の持病との付き合い
- ◎平成二十九年 大滝 保道(筆頭一席)
断捨離の成束の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ⇒書籍処分時
- ◎平成二十九年 井上管子道(筆頭二席)
いつからか知己の名探す「おくやみ園」思い湧きいづわが名の載る日
⇒自身の老いを意識した時
- ◎平成二十八年 大滝 保道
いつよりか「世話にはならぬ」が懐らごをり遠くに暮らす娘と語れば⇒娘との会話から
- ◎平成二十八年 大滝 保道
起業よりははや十五年廃業の意思を固めぬ勤労感謝日⇒会社を閉める決断をした時
- ◎平成二十七年 井上管子道
十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイルイフワーク⇒プレゼン資料作成時

-16-

まとめに代えて②(講師の羅針盤の例 :70歳時点)

弊冊子「続私的アンソロジー“しあわせの構図”」から転載

<遊行期へのメッセージ>

林住期(50～75歳)の途上にある身では遊行期(75歳～)について触れることは難しいことです。

それを経験できるかどうかさえ予測不可能なことから。

*「社会から身を引いて」……これは自信をもって言えます

*「欲望を抑えて」……む・む・む……

*「死を意識して」……意識の内容次第とも言えます

自身がこの世に生かされていた場合は おそらく

≪ 孤独な一人旅をしながら異空間へ突き抜けていく ≫

ための処方箋を模索して悪あがきしていることでしょう。

まとめに代えて③(講師の羅針盤の例 :75歳)

<遊行期の門(75歳での目標)>

70歳で冊子(&デジタルブック)を発刊して以降あためてきたのが続・続編の発刊です。

「心身が許すなら75歳で「続・続 私的アンソロジー“しあわせの構図”を発刊したい」と色んな場面で記してきました。

現時点では5部冊の構成を予定しておりアウトラインは次のようなものです。

- I 序
- II 歌集
- III 写真短歌集
- IV 表現の社作品集(責任編集)
- V コラム「飛耳長目」/著作・投稿・寄稿集/その他

終わりに

… 講師からの質問 …

“人生の四住期に沿って振り返って整理”して今後の
“人生の道しるべ（羅針盤）”をつくるような
【実践ワークショップ講座（今回の復習も含む）】
の企画があれば参加を希望されますか？

SKソリューションズ

代表 黒沼 貞志

〒990-0832 山形市西田1-12-10

TEL 090-2522-4548

FAX 023-646-2448

E-mail sks@sk-solutions.org

URL <https://sk-solutions.org/>

Facebook <https://www.facebook.com/sadashi.kuronuma/>

質疑応答&補足説明

ここからは時間の許す範囲で皆さんからの質問や資料などの
補足説明の時間といたします。

SKJソリューションズ

山形市立図書館市民の出版物展2022
 記念講座「写真短歌」への誘い
 SKソリューションズ 東店 貞志

◆講座企画

- ・基盤編（基礎講座十作四作品種鑑賞）：本日市民の出版物展2022記念講座で実施
- ・実践編（WS：例題による講読）：0月0日 2023年度企画？
- ・鑑賞編（参加者の写真短歌の発表と交流）：0月0日 同上？

◆講師プロフィール：

- ♪ 1947年 山形生まれ（山形東高、山形大学工学部を卒業）
- ♪ 1969年 日揮㈱入社
- ♪ 1999年 日揮㈱（現日揮 HILDS）を早期退職してUターン
- ♪ 2001年 ㈱SKソリューションズを設立
- ♪ 2016年 離職。その後SKソリューションズとして活動中

◆講座内容：お気軽に写真に短歌を添えた表現活動を楽しむ講座。

・・・写真と短歌を結合させた「創 意 画」
 が生み出す新しい世界・・・

♪ 1st ステップ：短歌の「み」と「し」

◆短歌を詠むということ（講師の選考）：
 人生を歌で楽しむの集まり「遊縁の衆」で短歌に興じる機会があり一人の経験者以外
 は参加者全員が未経験者でスタート。中学生の教員室に載っている短歌の教材から
 始まり自詠の短歌の合評会を重ねてながらその楽しみを継続して6年後に歌集「遊
 縁」を発行。

◆参考資料

- ・中学生の教科書に載っている短歌の教材（参考）：配布資料参照
- ・言葉の解片を五文字、七文字に登録してみる：
 参考書：五七語辞典（三巻堂）
 日本人のリズムの神髄にある五音七音の調べを、原句・漢句・短歌・川柳・
 俳句と、まじりて江戸から昭和前期までの独特性を代表する詩人の人名を
 作家たちの名号・名歌から採集した本



L.R
 Copyright SKJ(株) SKJ SADASHI kusunuma (2001～)

SKJソリューションズ

◆五文字、七文字を五・七・五・七・七に組合わせてみる⇒練習①：「遊縁」

◆喜び：つゆやきを紡いで三十一文字に仕立てる面白さ、楽しさ、できた時の達成感！

◆発見！！：短歌を詠むプロセスと写真の作品作り、類似性

写真を長年続けてきた私は難読短歌年短歌を咏むようになり、写真も短歌もその作る
 プロセスに共通点があることに気付きました。そしてこの二つを合体して一つの作
 品にしたら面白いのではと考え、「例題を切り揃って詠う『写真短歌』として紹介
 するのをお考えになりました。

（山形新聞平成31年3月21日掲載）



◆ぜひ自分写真や他人の写真で感じた気持ちをつまびやく言葉にしてみる！◆

♪ 2nd ステップ：写真短歌への試み（講師の例）
 <自分の写真短歌例①>

<写真>

昨年の12月、クリスマスの1週間前日に当日の
 晴雪がらcm短歌だったこともあき當か過ぎ
 しなかったのが幸いし、夕暮れ時に気取れし出て
 みたら写真のような嬉しい出会いとなりました。
 子供たち（？）の洒落たプレゼント（？）に連れ合い
 と二人して久しぶりにほっこりし縁が結びと時
 となりずかさず写真に収めました。

<つゆやき>

嬉しい縁舞 積雪（薄雲）が幸い？ 夕暮れ時
 ほっこり 縁が結びと時 メリークリスマス
 子供らの文字のいたずら嬉々（遊び）
 洒落たプレゼント上（？）

<言葉の整理>

積雪（に） 文字 子供の遊び（の）
 縁（結び） プレゼント メリークリスマス
 <短歌（未掲載）>

積雪に結び文字のプレゼント
 子供の遊びの「メリークリスマス！」

L.R
 Copyright SKJ(株) SKJ SADASHI kusunuma (2001～)

【自分の写真短歌例①】

<写真>

2月に入っの雷、狭義の雷を見ていたらイカの曲
「なごり雷」が頭に浮かんできてカメラに納めました。



<つゆやき>

イカ曲の歌 なごり雷 忘れ雷 近くて遠い春 貴との語らひ くり返し

<言葉の整理>

なごり雷 忘れ雷 待つ春返し くり返す(行ったり来たり)と往還

<短歌(未掲載)>

なごり雷「これがそうね」と受けり

妻も雷待つ春返し

<短歌(掲載後：やましん歌壇掲載)>

なごり雷「これがそうか」と受けり

妻も雷く春の往還

(令和2年4月27日付け「やましん歌壇」掲載歌(往還併天誼))



<写真短歌>

【自分の写真短歌例②】

<写真>

数年前に狭義に培えたジュンペリーが白い花が咲き
実を付けるようになりその実実を収穫してジャムを作る
楽しみが発見しています。
一昔前位から小鳥らに収穫の先を譲られるようになり
ジャム作りの楽しみが奪われつつあります。
そのような状況をスマホに撮り込んで見ました。



<つゆやき>

ジュンペリーニ 庭先 狭義 収穫 食べ頃 小鳥らがよく見ている

誰いと取北郎 あきらめ 譲る=春の共有 => 共生?

<言葉の整理>

小鳥ら(野鳥ら) ジュンペリー(の) 収穫(巻)

誰いと取北 譲る 奪わす

<短歌(未掲載)>

・野鳥らとジュンペリーの収穫を競えど奪わず今朝も取北

・庭先のジュンペリーの収穫を野鳥と競い今朝も取北

<短歌(掲載後：やましん歌壇掲載)>

小鳥らとジュンペリーの収穫を競うも譲る「共生」のため

(令和4年10月31日やましん歌壇掲載 保護)



<写真短歌>

【他人との共同制作例①】：Facebook (FB) に投稿された知友の写真に短歌を添えた作品

<つゆやき>

仕事で真冬に東京を訪れた時の雪中(華外は吹雪く雷雲)の情景を撮んだ。
この時はカメラを持っておらず写真を撮ることができなかったが6月に強い印象が残り
撮影時につゆやきを記した。

<言葉の整理>

別業 吹雪く雷雲 女子高生 にざわら雪中

<短歌>

雷雲を一輪列車通み行く女子高生のに雪はい乗せて

(平成28年2月21日やましん歌壇掲載(未掲載))

<写真との出会い：長谷川圭夫さん(山形大学)> (令和2年12月掲載)



<写真短歌(共同制作)>

この作品は短歌が先にできていて短歌単独の作品と
なっていました。

そのような経緯に(5年後)F日の友誼(長谷川さん：
当時は山大生)が投稿した写真に出会い、自分の短歌に
ピッタリと思い了承を得て共同制作の作品としました。



【他人との共同制作例②】：知友から受領した葉書の写真に
短歌を添えた作品。

<写真：三浦雅一さん(文障路ガイド)> (令和4年2月掲載)

<つゆやき(俳句)：若三某さんの葉書から引用)>

昨日、サンビアの鳥籠を散歩。ヤマガラに出会いました。

冬枯れの枝ゆえ、姿を捉えることが出来ました。

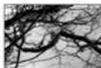
3メートル位まで近づいても逃げない、ひとつこいんでやね。我を忘れて、しばし、その
小顔みな動きに見惚れていました。

<言葉の整理>

冬枯れの枝 ヤマガラ(山雀) 歳暮 散歩道 見惚れる 懐く 幼少期

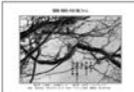
<短歌(未掲載)>

冬枯れの枝に歳暮ヤマガラに見惚れて懐へり幼少期



SKJコラボレーション ... 地域の良機をコンセプター形勢して ...

<短歌（掲載後：やましん歌壇掲載）>
 雪枯れの枝に盛る山嵐に
 降覆れて雫へりわが幼少期
 （令和5年2月27日やましん歌壇非上置子葉）



<写真短歌（共同制作）>

【他人との共同制作例③】：Facebook（FB）に投稿された他人の写真に短歌を添えた作品
 <写真：大塚俊幸さん（山形市職員）> （令和4年12月撮影）



<つゆやき（大塚さんの投稿記事から引用）>
 今日「やまがた舞子と花小路秋まつり」のお手伝いでした。
 料亭「貞手旅館」を舞台にした初のイベント、人がいない様に
 運ったので伝わりにくいけど、舞子の演舞は経済員、花小路は
 人なまやキッチンカーで活気と賑わい、伝統の郷土文化が漂う
 角座から見えて、古いものが新しく見えるイベントだねと、
 記者さんもおいしいね講師。

<言葉の整理>

花小路 貞手旅館 人か華 料亭文化 秋まつり
 イベント＝演舞 集める・賣まる 日がな一日

<短歌（未掲載）>

花小路おちがけ求めて集まりし集めし人の日がな一日



<写真短歌（共同制作）>

2 3rd ステップ：写真短歌作品鑑賞（短歌の写真短歌作品例）

【佐藤紀之さん：山形市立図書館職員】
 短歌：履もたれに掛けし履のジャットは
 仕事を終えた履の掛け履
 （令和2年9月24日旅行新報地方版置葉子葉）



5/8
 Copyright SKJ/つづき SADASHI koruma (2001～)

SKJコラボレーション ... 地域の良機をコンセプター形勢して ...

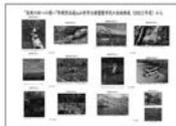
【林 保彦さん：谷地八幡宮宮司】

短歌：夜半の雨止みて風たつきささげの
 行くには惜しき花の下みち



2 4th ステップ（番外1）：

(1) 写真短歌作品鑑賞会 2F 展示ホール
 山形市立図書館市民の出版物展 2022
 『"写真短歌"への思い』『"表紙の社"への思い』年間作品展



(2) 参考情報：

これまでの年間作品展 山形市立図書館市民の出版物展
 『"写真短歌"への思い』、『"表紙の社"への思い』

<2019年：写真短歌：チラシ>



<2019年：写真短歌12作品>



5/8
 Copyright SKJ/つづき SADASHI koruma (2001～)

<2020年：写真短歌12作品>



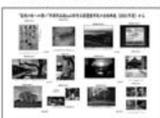
<2020年：表紙の社6作品>



<2021年：写真短歌12作品>



<2021年：表紙の社12作品>



※ 5thステップ（番外2）：多様な表現手段（写真、短歌、俳句、イラスト、短文、書等の組合せの”対”＝”表紙の社”）の作品の紹介用HP（下記URL）の「写真短歌・写真俳句・その他投稿コーナー」には2020～2022年の3年間で172作品の投稿が増えています。それらの中から写真短歌以外の＜写真俳句＞＜短歌書＞＜写真短文＞＜短文イラスト＞のそれぞれ一冊を紹介いたします。 URL：https://sk-solutions.org/archives/tanka_g

<写真俳句：写真と俳句（西田さん）>
俳句：凛と立つ様が私に生を贈う



78
Copyright SKソリューションズ SADASHI kurumama (2001～)

<短歌書：短歌&書（佐藤さん）>



<写真短文：写真（黒田）×短文（おんみょうじあじきさん）>
短文：「ね、ダメ？」「ダメだね！」（ねだめだね）



<短文イラスト：短文（おんみょうじあじきさん）×イラスト（にょん太さん）>
短文：「愛語」「懐気」



88
Copyright SKソリューションズ SADASHI kurumama (2001～)

撮る×詠む

写真短歌への誘い



母の背に手を添え歩む子の背にも老い映りける孝行花見

写真を長年続けてきた私が人生を数倍楽しむ集まり「遊緑の衆」で短歌を嗜むようになり、短歌も写真もそれぞれ創るプロセスに共通点があると気付きました。そしてこの二つを融合させたら面白いと考え、「情景を切り撮って詠う」ということを試行しながら【写真短歌】として市立図書館の常設コーナーで紹介して5年になります。また、多様な表現方法(写真・短歌・俳句・短文・書・台詞)を組合せた作品も【表現の杜】として展示しています。皆さんの関心に少しでも届くことを願っています。(写真短歌 黒沼貞志)

山形市立図書館 市民の出版物展2022記念講座のご案内
「写真短歌」への誘い(基礎編)
日時:3月5日(日)13:30~15:30 場所:山形市立図書館・2階集会室
お申し込み先:山形市立図書館 ☎023-624-0822 持ち物:筆記用具
事前にお申し込みの上、短歌を添えてみたいお写真などがありましたら当日ご持参ください。
※山形市立図書館2階展示ホール/特別展示『黒沼貞志作品展』 3/19まで開催中

撮る×詠む

写真短歌への誘い



祭りへと歩みを揃う親子づれすがしき初夏の山間の道

写真は蔵王にある「鴨の谷地沼」を訪れた折に親子に出会い、これから祭りに向かうと思われるその後ろ姿に微笑みささと懐かしさを覚えてシャッターを切りました。短歌はその時の印象を詠んだ一首です。

写真を長年続けてきた私が人生を数倍楽しむ集まり「遊緑の衆」で短歌を嗜むようになり、短歌も写真もそれぞれ創るプロセスに共通点があると気付きました。そしてこの二つを融合させたら面白いと考えて「情景を切り撮って詠う」ということを試行しながら【写真短歌】として市立図書館の常設コーナーで紹介して5年目になります。

S Kソリューションズのホームページ(<https://sk-solutions.org/>)に、これまでの作品を掲載しております。よろしければ、ご覧いただき感想などお寄せください。 (写真短歌 黒沼貞志)

「IV コラム 飛耳長目／著作・投稿・寄稿」へのあとがき

5年前に続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃の冊子版で発刊し知り合いの方々へ謹呈した際に、心身が許すなら75歳で続・続篇を制作したいと送付のメッセージに添えたことを頭の片隅におきながら少しづつ進めて来しました。

この続・続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃の編集作業を通じて試行錯誤をくり返しながら分冊にする構想に至り、この「IV コラム 飛耳長目／著作・投稿・寄稿」への「あとがき」を書いているということは何とか発刊の目途が立ったと言え内心ほっとしている自分がおります。

これからの課題としてはこの冊子（続・続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃）のデジタル化に取り組むことが残ります。

1947年山形市生まれ。ソリューション・コラボレーター。山形大学工学部卒業後日揮(株)入社。企画・プランニング・基本設計・建設・運転・プロジェクトマネジメント・営業などを通して海外および国内産業界の各種ソリューション(課題解決)・プラント建設・運転などを担当。1999年日揮(株)退職し山形にUターン。2001年(有)SKソリューションズ設立(代表取締役)。経営コンサルティング業の傍らCB推進コンソーシアム(プロジェクトマネージャー)、山形市福祉のまちづくり活動委員会(事務局長)、おいしい山形の食と文化を考える会(事務局長代理)、(LLP)山形ふるさと企画舎(代表)、地域力共創推進コンソーシアム(代表)、NPOパワーアップコンソーシアム(代表)、東北まちづくりオフィスサイトミーティング(運営委員)などを通じて地域力共創に関わる。2016年(有)SKソリューションズを解散しSKソリューションズ代表として活動中。

1995年 三人展(写真) @横須賀市

1996年 個展「しあわせの構図」(写真) @横浜
ランドマークプラザ

2009年 DVD 私的アンソロジーを上梓

2015年 遊縁の衆として歌集【遊縁】を上梓

2018年 冊子&デジタルブック「続 私的アンソロジー」しあわせの構図」を上梓

「しあわせの構図」を上梓

続・続 私的アンソロジー “しあわせの構図”

「IV コラム 飛耳長目/著作・投稿・寄稿」

2023年3月13日 初版1刷発行

著者 黒沼 貞志

発行者 SKソリューションズ

〒990-0831 山形市西田1-12-10

Fax 023-646-2448 Tel 090-2522-4548

E-Mail sks@sk-solutions.org

URL <https://sk-solutions.org/>

印刷・製本 冊子印刷ドットコム(株式会社春日)

頒価(分冊I・II・III・IVケース入り) 1,000円

© Sadashi KURONUMA/SK Solutions 2023